現地医療関係者等に活動の引継ぎを行い、緊急救援活動を終了します。
実は、私はボランティアに参加して恥ずかしながら初めてアムダの存在を知りました。ロータリーに関わっていなかったら、関わりのないこのような医療チームの中で微力ながら活動できた事を心からロータリーの皆様に感謝しております。
本日は、簡単にボランティア参加に至る経緯、現地の状況と活動内容、そして帰ってきてから思う事についてお話ししたいと思います。

ボランティアに至る経緯

大学の友人や親戚が宮城県にいることから、人ごとに思えずに、地震直後から何かしたいと思っていました。そんなとき、ガバナー事務所からローテックス宛にメールをいただきました。情報が錯綜していて確かな情報がないまま、3月23日発のボランティア派遣に応募したのがきっかけです。結局その話も流れ、27日発の話も流れました。もうないのかと思っていた矢先、29日のお昼頃、事務所から連絡を受け、明日30日発の便に乗れるかと聞かれ、ほかにスタンバイできている人がいないようだったので、是非この回に行かせてください、という事になりました。24日に久保田さんのお心遣いでロカ君と会う事ができた際、ロータアクト会長、福本さんからもボランティアの話を伺っていましたし、またご自身も被災地支援に行かれているという事で多少、心の準備ができました。しかし、実際は医療チームに入って自分がボランティアとして何ができるのか、不安で不安で仕方ありませんでした。しかし、こんな機会は滅多にありませんし、役に立てるかどうか、という不安半分、得られる経験への期待半分という気持ちで現地へ行きました。
現地入りはなんと、ヘリコプターでした。新木場のヘリポートから2時間半ほどで宮城県南三陸の本部のあるベイサイドアリーナへ到着しました。福島の原発を内陸側によけて行ったので、少し時間がかかったそうです。

現地の状況と活動内容

南三陸町はまだライフラインの復旧めどの立っていない地域です。私の滞在した志津川地区は町の中でも一番被害が大きく、被災率79.6%の地域です。約八割の住宅が津波の被害に遭い、壊滅的な状況でした。電気も、ガスも、水道も通っていない小学校で、炊き出しに頼る生活をしました。現地入りしたとき、前からいた心理士の方に「お邪魔しているという意識を常に忘れないように」というアドバイスを受けました。私たちは、教室ひとつにメンバー約10人で寝袋と毛布、懐中電灯という被災者の方達と同じ生活をしました。アムダからの物資、非常食やお菓子、電池、マスク、ウェットティッシュ等が常にあったため、被災者の方々よりもいい生活をしていたのかもしれません。現状は正直、私にはわかりませんでした。
今回の派遣で、ボランティアとしての決められたミッションはほとんどありませんでした。自分たちで進んでできることを探すという事が重要でした。現地では子供たちが室内でうるさく遊ぶ事から大人が疲弊してしまっているという状況を耳にしたので最初、子供たちを集めて外で遊ぶ企画を立てました。しかし、企画書を作って大々的にやるには学校の許可が必要で、実際、教頭先生も大変な状況でしたし、時間的にも心の余裕の面からも、学校から許可をいただく事ができなかったので、大々的に行う事はやめて、時間を決めて子供たちを集めて一緒にグラウンドに連れ出して遊ぶという事を積極的に行いました。
また、公衆衛生の面でトイレの匂いや感染症の危険性が問題視されたため、アムダへの必要物資で届いた消臭剤を各トイレに配布したり、外出後やトイレ後のアルコール消毒の斡旋ポスター作りをしたりしました。水道が通っていないので、きれいな水は自衛隊の給水機のみで、手も洗えません。トイレも水が流れないので、毎朝プールの水をバケツで組んできてトイレの前に溜めておき、用を足した後はバケツの水で流します。お風呂も入れないのでとても不衛生な環境でした。ただ、自衛隊の用意するお風呂や、近くの温泉への送迎が決められた日時にあり、被災者の方達は自治会の情報をたよりに利用していたようです。
現地入りして3日目の夜、ノロウィルスの患者さんが出て、数名の感染が確認されました。アムダの医師とナースの指示のもと、ボランティアの私たちはノロウィルス感染者のための隔離部屋の準備をしました。私にとって最終日でしたが、この日が一番慌ただしく医師の先生方もピリピリしていたように感じました。

帰ってきてから思う事

4日間という短い間でしたが、学ぶ事が多い、濃い4日間でした。何もかもが手探りで、ボランティアという何の専門知識もない私たちにできたのは本当に微々たるものでしたが、この経験を次につなげたいと強く思っています。ここからは、帰ってきてから思う事を、被災地生活について、支援する側の配慮と現実について、そして私の人生への影響についてというポイントにしぼってお話致します。
まず、被災地で被災者と同じ生活をしてみて思ったのは、私は4日間という終わりの見える生活だったから耐えられたのだと、思いました。電気、ガス、水のない生活を通して、被災者と同じ生活をする事で少しは痛みを理解する事ができるのかと思っていましたが、とんでもない思い違いでした。現地に行ってもなお、彼らの思いを想像

する事はできませんでした。なぜなら、私には帰る家があったし、電気、ガス、水のある生活が神奈川に戻れば確実に待っていたからです。また、子供たちから学ぶ事、ドキッとする事も多かったです。現地で仲良くなった子供たちと遊んでいるとき、○○と○○どっちが好き？という質問の遊びをしました。最初はカレーライスとラーメンから始まったやり取りが、しまいには、「家とお金どっちが好き?」になりました。そこで小学校5年生の子、ちかちゃんが「家だよね?お金だけあっても仕方ないもん」と答えていたのを、なにも答えられずにただただ、聞いていました。それから、本当に大切なものを自分自身に問うようになりました。また、彼らに別れの挨拶をするとき、6歳の男の子、ともや君に「どこに帰るの？」と聞かれ、うまく答えられなかったのを鮮明に覚えています。

これらの話はメディアでは知る事のできない本当の話です。そして、NHKでさえも被災地の現状を、涙を誘う、情に訴えかける報道をしますが、メディアや外部からの支援の役目はそれだけではないと思います。被災地ではもっともっと娯楽や元気づける番組や活動が必要だと私は思いました。そこには一日も早いライフラインの復旧はもちろんのことですが、社会全体の被災地への配慮が足らない、うまく伝わっていないという現実があります。例えば、私が現地入りした前日は日本代表vs. Jリーグ選抜のサッカーの試合が行われた日でした。しかし、南三陸では中継を見ていないとの事でした。体育館にある自家発電のテレビをつける時間帯は決まっていて、夜７時には外が暗くなるのでみんな寝る準備をします。テレビも当然消します。そんな中で、被災地支援を目的としたゲームが実際、被災地には届いていなかったのです。どのポジションで働くにしろ、社会の一員ならば伝えたい側の伝えたい事、をしっかり確実に伝えなくてはいけないと思います。気持ちを込めて丁寧な仕事をすることで“仕事”としてこなす以上に伝わる、伝える力がある、そう信じたいです。特に日本のメディアがそうなる事を強く願います。

今回参加した事で、アムダで働く調整員、医師の方々、カウンセラーの方々と知り合う事ができました。これは滅多にない貴重な機会でした。調整員の森田さんはハイチでずっとインターナショナルチームとして活躍なさっていた方で、外国語ができて当たり前の状況で仕事をする人の話を伺い、視野が広がりました。彼女は率先して私がやりたいと思う事をやらせてくれようとしました。アムダは人材育成も担っているとおっしゃいました。一度経験しておいたら、次に、同じような事が起こったとき予測がつきやすくなるからだそうです。だからこそ、ボランティアで今回何ができたかということも大事ですが、それよりも、この経験をより多くの人に伝え、次につなげられるように自分が成長しなくてはいけないと思っています。

今回の経験で、学んだ事は多く、頭の整理ができていない部分も多々あるのですが、今思いつく限りで申し上げますと、NGOという立場で仕事をすることについて、行政が手の届かないところを素早い行動で補って行く姿勢に感銘を受けました。そして、支援とはただ被災者の手伝いをするのではなく、彼らが自立できるようにサポートする事なのだということを学びました。ボランティアが掃除、水汲み、ゴミ燃しなどを率先してやってしまうと、住民がやらなくなる。それは持続可能ではありません。つまり、ボランティアとして入って考えた事は、なんでもかんでもやってしまう事は結局被災地のためにならないという事でした。その点も、アムダとして現地入りしたから学べた事だと思います。また、このアムダの膨大な費用がすべてがDonation（寄付）だということを知って、本当にびっくりしています。森田さんは、「寄付で成り立っているため、広報活動もしっかりしたい」と言っていました。アムダのホームページに毎日支援活動の様子が報告されているので、是非、ご覧ください。

NGO、行政、企業、家庭、支援する側、される側、いろんな立場の人間がいて、社会が成り立っている事、そしてそれぞれが必ず関わり合っている事を肌で感じ、本当に視野の広がった4日間でした。社会に出る前の大学生という立場でこの経験ができた事は本当に幸せな事だと思っています。引き続き、私にできる事を被災地のために考えて行動して行きたいと思っています。そして、この経験を次につなげられるよう、これからも積極的に様々な分野に興味を持ち、日本に、世界に還元できるような人間になりたいです。このたびはこのような貴重な機会を与えてくださって本当に感謝しております。

ご清聴ありがとうございました。

国際交流プロジェクトの報告　本多　純二リーダー

韓国大邱クラブとの姉妹提携による記念事業が、先月末まで全ての工事が完成いたしました。35周年記念事業としてお互いの国の木を植樹するという事で、前年春に韓国に桜の木を植樹しました。先月3月6日（日）に県立諏訪の原公園にて韓国の木である「むくげ」を50本植樹しました。

同時に35周年記念事業として「むくげ」の木の横にあづまやを建設し、「むくげ亭」と名付けました。そのオープン式を4月9日10時から行い、テープカットしようと思いますので、お時間のある方はぜひお集り下さい。

記念事業のひとつとしてローターアクトのバナーができました。

次回4月19日は「新会員の集いに参加して」です。